

戦争から平和へ

— 南京国際平和都市建設におけるラーベ記念館の役割を例に —

楊善友

南京大学ラーベ記念館副研究館員

ラーベ国際平和と和解研究交流センター主任

2017年は日本軍による南京大虐殺および中華民族全面抗日戦争勃発80周年であり、また時を同じくして南京が国際平和都市に選ばれた年でもある。当時の侵略者の足跡は、すでに時の流れとともにほとんど無くなってしまったかもしれないが、彼らの暴行と罪悪は中国各地の抗戦遺跡として物質化されただけでなく、人類の歴史における恥辱の柱の上に無形の状態で存在する。嫌というほど戦争で傷ついた中国人民、特に南京市民は、戦争や平和に対する理解がよりいっそう深遠である。全国初の抗戦遺跡としてのラーベ記念館は、歴史の立会人であるだけでなく、一連の一大イベントを通じて影響力を高め、「南京対外文化交流基地」となり、南京国際平和都市建設のために然るべき役割を果たしている。

1. ラーベ記念館が行った一大イベント

南京大虐殺の間、ドイツのシーメンス社ビジネスマンだったジョン・ラーベ氏（以下略称、「ラーベ氏」）は、南京安全区国際委員会主席として、世界の友人らを率いて「南京安全区」を建設しただけでなく、設立した25カ所の難民収容所において25万人の中国人民を救った。そのうち、ラーベ氏の居住地（シーメンス難民収容所）では600人余りが保護された。さらにラーベ氏が当時残した日記も南京大虐殺の重要な史料となっている。永遠の記念として、中独双方は、南京大学キャンパス内にあるラー

ベ旧居にラーベ記念館を共同で建設した。2006年の開館以来、ラーベ記念館はドイツ前大統領・日本国駐中国副総領事など国内外の参観者20数万人を受け入れ、一連の宣伝・教育・研究・交流などの形での重要なイベントを行ってきた。

1) 映画『ラーベの日記』メディア発表会の開催

2009年4月14日午後、「ラーベの日記が南京に再び戻る／歴史を遡る」メディア発表会が南京大学ラーベ記念館にて開催された。南京テレビ局の著名な司会者である大剛氏がこの発表会の進行を務めた。映画『ラーベの日記』の主な製作者である王中磊氏、中国国内の有名女優である張静初氏（金女大学の学生役）、李明氏（ラーベ氏の運転手役）が話す映画撮影時の感想を中国国内外60人以上の記者が会議に出席し、取材した。また、会議はラーベ記念館の建設と資金、寄付金を管理する会社の代表および当時ラーベに保護されたことのある生存者代表が招待され、発表会に出席した。『ラーベの日記』は、中国政府の許可を得て外国人監督が撮影した南京を題材にした唯一の映画である。この戦争史詩大作映画のワールドプレミアが現地時間の2009年2月7日にベルリン国際映画祭で行われた。映画は、南京大虐殺の歴史的事実を正面から表現したために、これにより製作チームは関連する日本人の俳優を探す際、多くの困難に見舞われ、最終的に香川照之氏が勇敢にこの役を引き受けた。香川氏は「日本ではジョン・ラーベ氏を知っている人はそれほどいません。

これはとても複雑な映画でいくつもの顔を表現しましたが、私はそれを日本の観客に見てもらいたいと思っています」と述べた。また、映画の中国プロデューサー華誼兄弟総裁の王中磊氏は次のように表明した。

『ラーベの日記』の映画をプロデュースして出品することは、中国映画人にとって光栄なことです。映画のタイトルを以前の『ジョン・ラーベ』から『ラーベの日記』に変えたのも、この作品の中国民衆の中における崇高な地位を考慮したからです。映画がこの夏に公開・上映されるときには、南京の歴史を刻む中国の観客がその悲惨な歴史の中から人間らしい暖かさを感じ取り、中国民衆の頑強不屈の精神の中からパワーを得ることを望んでいます。

2) 国際平和学術フォーラムの開催

2010年6月8日、ラーベ記念館主催の「ラーベ逝去60周年記念・国際平和学術フォーラム」が南京大学で開催された。ドイツ・カナダ・日本および中国国内の一部大学から120数人の専門家・学者が会議に参加し、国際平和問題をめぐり3時間余りに及ぶ激しい討論を行った。南京市共産党委員会宣伝部の王崑副部長、ドイツ駐上海領事館総領事ハイデン氏、シーメンス(中国)有限公司副総裁・南京大学ラーベ基金管理委員会主任委員の王偉国氏、楊子石化一バスフ有限公司総裁の布銘邦氏、ボッシュ家用电器(中国)有限公司(BSH)副総裁兼首席財務官の魏博氏などが開会式に出席した。周憲校長補佐は南京大学を代表する挨拶で、今年はラーベ氏逝去60周年であり、本会議は主にジョン・ラーベ氏をはじめとする南京安全区国際委員会のメンバーを記念するために、国際人道主義精神を発揚し、世界平和と調和を呼びかけると表明した。王崑副部長はスピーチで、ラーベ氏の危険や困難に直面している人を助けて苦難から救い出した正義・慈善の行いは、70数年来ずっと広く語り伝えられている。ラーベ記念館および交流センターは正式に对外开放されてから、宣伝教育と文化交流プラットフォーム

としての役割を十分に発揮してきた。ラーベ氏の仁愛の心をいっそう偲び・世界平和と人類の文明の進歩を促進することに対して、積極的な影響を生み出したと述べた。ハイドン総領事は挨拶で、今回のイベントの開催は過去を記念するだけでなく、将来にとっても大いに啓発的な意義があると述べた。また、第二次大戦中ドイツのユダヤ人難民が中国上海に逃げて避難した様子をしみじみと回顧し、中国人民の当時の救助や慈善の行いに対し感謝の意を表した。

3) 平和文化人材育成活動の実施

2013年以来、ラーベ記念館は継続的に、青少年平和文化人材育成活動を実施している。所蔵資料の平和文化的要素の発掘を通じて、異なる方法により青少年に対し平和教育を行うことは、時代の発展ニーズに順応することであり、このイベントの初志でもある。主に以下の内容を含む。

- ①南京大虐殺国家追悼日イベントの開催。2014年12月13日、ラーベ記念館は「誠・祭」集団追悼式を行った。南京大学の朱慶葆党委員会副書記が式に出席した。
- ②特別講座の開催。2014年12月4日、「平和の勇士ジョン・ラーベ」をテーマとする平和特別講座を行った。南京師範大学附属中学校の600人以上の学生がラーベ氏の物語に耳を傾け、『東方衛報』・『南京日報』・『現代快報』の各社が報道した。
- ③テーマ展の製作。2015年5月、「ベイツ：全世界に平和を与え、人類に慈悲を与える——中国人民抗日戦争および世界反ファシスト戦争勝利70周年記念」の企画展を開催した。ベイツの学生、章開沅氏がラーベ記念館のために「南京大虐殺の歴史の証人」と揮毫した。7月、イギリス内部省国務大臣のマイク・ベイツ卿は中国における「平和のために歩む」期間中、ラーベ記念館を2回見学した。
- ④中国国内外学生ボランティアの募集。現在すでにアメリカ・日本・オーストリアなどの国を含む28人の国際ボランティアが活動している。ボランティアは、歴史を学んだだけでなく、お

互いに友情を育んだ。2010年、日本の国際基督教大学の中村さんは、ラーベ記念館ボランティア活動の際に、「私たちはラーベを忘れてはならない、日本軍が当時南京で行ったあらゆる行為を忘れてはならない。中国・オーストリアの学生たちが私たちを連れて南京を見学しました。私たちは友人になりました。日本に帰国したら、私は自分の体験を同級生らと共有します」と述べた¹⁾。

もう1つは、南京大学の校史資料に対する整理発掘を通じて学校の中心的活動の奉仕をすることである。南京大学は大学精神と大学の根底にあるものを発掘するため、2015年3月11日正式に「南京大学校史文献資料整理と研究重点プロジェクト」を始動した。ラーベ記念館はこの機に乗じ、自ら志願し、所蔵資料を十分発掘・利用し、学校の校史研究および校史教育を完成させるため、自らの貢献を果たした。ラーベ記念館の所蔵資料（ラーベ資料とも呼ばれている）は主に、南京大学の源の一つである金陵大学の資料とラーベ氏やベイツ氏などを含む南京安全区国際委員会、またはその他の国際救援組織メンバーの全家族の資料があり、うち4人が金陵大学の教授であった。「史料のないところに歴史はない」²⁾、このため、これら全ての資料や史料は、当然ながら校史研究に欠かせない内容となっている。同時に、研究成果も学生平和教育の生きた教材となっている。ラーベ記念館の平和人材育成活動は、全国大学博物館人材育成連盟主催の優秀人材育成プロジェクト二等賞や、教育部第7回大学キャンパス文化建設優秀成果賞を受賞し、「南京大学キャンパス文化10大ブランド」などの荣誉ある称号を獲得した。

2. ラーベ記念館の国際的影響

中国外交部の王毅部長は、当時の日中関係を第一次世界大戦時のドイツとイギリスの関係に例えた人

がいた際、以前次のように回答した。第一次大戦前のドイツを取り上げて言いがかりをつけるよりも、第二次大戦後のドイツを手本としたほうがよい。日中関係・中独関係およびドイツと日本の第二次大戦に対する明らかに異なる態度は、ラーベ記念館においていずれも十分に実現され得る。ラーベ記念館は日本軍の南京大虐殺事件をテーマとした、日本の中国侵略戦争の歴史の立会人である。ラーベ記念館も中独友好交流の結晶であり、両国国民の友好や友情を担っている。

1) ラーベ記念館は南京大虐殺の歴史の証人

2013年12月26日、安倍晋三首相は14人の第二次世界大戦A級戦犯が祀られている靖国神社の参拝を強行した。その後、少数の日本の右翼が何度も勝手に歴史を歪曲し、南京大虐殺の殉難者の人数において謂われのない言いがかりを付け、ひいては南京大虐殺というこの歴史的事実を愚かにも否定しようとした。このような間違った行為は、中国やその他アジアの戦争被害国の人々の感情を乱暴にも踏み躪ただけでなく、国際社会の高い警戒心を引き起こした。このため、中国外交部外国記者新聞中心および江蘇省外事弁公室は、米CNN・米「ウォールストリートジャーナル」・英ロイター通信・AFP通信社・朝日新聞社・時事通信社・韓国聯合ニュースなど26のメディアと45人の外国駐中国メディアの代表を組織し、南京大虐殺遭難同胞記念館・南京市資料館・ラーベ記念館および抗日航空烈士記念館へ赴き、現地見学・取材を行い、歴史の真相を自ら体感した。2月20日午前9時ごろ、記者一行は南京大学キャンパス内にあるラーベ記念館を訪れた。国際社会にもっと日本の中国侵略戦争の歴史的真相を理解してもらい、日本軍国主義が復活を企む本質を見極めるために、ラーベ記念館は記者たちに通常の展示内容を紹介した以外にも、資料棚から何種類かの所蔵資料を初めて完全な形で展示した。その中には主にラーベ氏の「南京爆撃」原稿・南京大虐殺史料集と南京大虐殺全史およびラーベ旧居に保護された難民リストが含まれていた。

今回3時間近くに及ぶイベントの中で、ラーベ

記念館は終始史料の展示を大筋とし、また資料を証拠とし、事実を用いて語ってきた。様々な媒体による歴史資料の立体展示は、メディア代表の強烈な反響を生み出した。ロシアータス通信社記者のマリン・アントン氏 (Marinin Anton)、英「デイリー・テレグラフ」のフィリップス・トム氏 (Phillips Tom) は、「これまでジョン・ラーベの名前を聞いたことがなかった。今回の見学と取材は私たちに大変深い印象を残した」と述べた。米 CNN 記者のミラー・チャールズ氏 (Miller Charles) とマッケンジー・デイヴィッド氏 (McKenzie David) は、「南京大虐殺犠牲者の数は人を苦しませる事実であり、政治の上でさらに多くの論争を再度引き起こすべきではない」と表明。ジョン・ルイッチ氏 (John Ruwitch) は当日、イギリスロイター通信のニュースネット上で「中国が日本に南京大虐殺の歴史を正視するよう懇請する」というタイトルの報道を行った。「大公報」の李理記者は2月21日発行の「大公報」上で「過去の過ちを暴き出し日中両国の歴史と今日を認識する」のタイトルで、記者一行の南京の見学イベントについて報道を行った。同時に、新聞には李理氏がラーベ記念館のために書いた「中国の外交政策を長期にわたり報道している記者として、私はあなた方の歴史に対する厳しくもまた責任ある態度に非常に感謝している。真理が永遠に嘘に打ち勝つことを願う」という内容の直筆の手紙を折り込んだ。今回の見学イベントについて外交部の華春瑩報道官は24日、「まさに多くの外国メディアの報道の評論が指摘しているように、これほど多くの有力な歴史事実を突きつけられても、日本側は依然として言い逃れを企み、悔い改めようと思わないのならば、世の中の人々が理解できないだけでなく、日本の将来の行く末について国際社会に懸念を抱かせてしまう」と述べ、華報道官は最後に「歴史は忘れてはいけない。歴史を正視し、歴史を鑑とすることで始めて未来に目を向けることができる」点を強調した。

2) 中独友情の心の絆

構築したのはゆるぎない歴史であり、また時代の

縮図である。ラーベ氏は人道主義精神に則り、中国人民に保護と救済を与えた。まさに、一滴の水の恩を湧き出る泉を以って報いるのである。ラーベ氏が最も困難なときに、中国人民も彼に援助の手を差し伸べた。1938年2月、ラーベ氏は転任命令を受け帰国する。尽きることのない良識が、ラーベ氏をドイツでも引き続き、日本侵略者による南京での極悪非道の犯罪行為を暴き出すよう突き動かし、ナチスの脅しや脅迫に遭い、晩年の境遇は極めて厳しかった。ラーベ氏の境遇が南京に伝わると、当時の中国政府はかつての難民から「生き菩薩」と崇められた外国の友人を忘れてはおらず、あれこれ方法を考え色々な援助を提供した。市会議員の一人が提案して成立したラーベ寄付金委員会は銀行・金融業・大商店および地方の慈善団体や当時救済保護を受けた市民から寄付を募ると、何日も経たないうちに1億元が集まり、市場価格にして2,000ドル、人づてにドイツへ送金しラーベ氏を援助した。ドイツは戦後の状況が劣悪だったため、どのような食料の提供も制限が行われ、お金が有っても食料が手に入らなかった。瀋陽南京市長は1948年3月、この知らせを聞いた後、最速の方法でスイスで大きな袋に入った食品を4袋購入し、ラーベ氏に送り、彼が行った以前の義挙に対して南京市民の感謝の意を表した。まさにこれらの食料が、ラーベ一家が最も苦しい「バルリン危機」を乗り切る助けとなり、加齢で衰えた晩年のラーベ氏への慰めとなった。

ラーベ記念館開館当日、中独の友情を担っている記念館は、開幕式に参加するために来た中独双方の来賓を前にして感慨無量であった。ラーベ氏の孫、ハイデルベルク大学医学教授のトーマス・ラーベ氏は、祖父の塑像の前に花束を献上した。トーマス氏は次のように述べた。

祖父のジョン・ラーベはずっと家族全員の手本であり、第二次大戦中に中国の友人を保護した祖父の勇敢な行いは、一人の者が果たすべき責任を果たした。祖父の一生は中国で30年過ごし、中国を愛し、中国を理解した。だから命懸けで中国の友人を助けることができた」と語っ

た。また、「祖父が25万人以上の生命を救うことができたのは、南京安全区国際委員会の全ての友人の支持があってこそ実現することができた。これは、国際平和人士の共同の行動であり、個人の行動ではない。ラーベ旧居は中独友情の媒体として、人々が歴史の真相を理解し覚えてもらい、また衝突を避けるための貢献をする。

ドイツ連邦共和国駐上海総領事館ヴォルフガング・ロー（Wolfgang Rohr）総領事は次のように述べた。

私たちは尊敬と謙虚の気持ちでジョン・ラーベ氏の事績を偲ぶ。尊敬するのは、ラーベ氏が正しいときに正しいことを行い、命懸けで助けが必要な人々に援助の手を差し伸べたからである。謙虚なのは、ここでやがてドイツの名義を帯びた罪が生じて、こちらの「南京のいい人」の行いの上に長期にわたる暗い影を投じた。私たちは公正にこのような以前南京で生活していたドイツ人のために誇りを感じることができるし、ラーベ氏は中国の友人を守るため、苦しいときにも中国に残った。ジョン・ラーベ氏よりももっと相応しい中独友情の代表例を見つけることができるでしょう。

今日までに、習近平主席は、中独両国国民の歴史と友情を語る際に次のように述べた。

ドイツ人は山と山はめぐり合わないが、人と人はめぐり会うと言いました。中国人民はドイツの人々との悠久の交流の歴史と深い友情があります。今この時、私は思わず中国人民が敬愛する一人のドイツの友人を思い出しました。その人はラーベ氏です。七十数年前、日本の軍国主義が中国南京市に進出し、三十数万人の中国軍隊と人民を虐殺する残虐極まりない虐殺事件を起こしました。その危機の瀬戸際で、ラーベ氏は他の十数名の在中外国人士と連絡をとり、

「南京安全区」を設立、二十数万の中国人のために身を寄せる場所を提供しました。ラーベ氏は日記の中で大虐殺の内情を詳細に記録し、それがこの歴史を研究する重要な証拠となり、中独共同で建設したラーベ記念館が南京で公開されました。そして、去年の年末に南京市が建てたラーベ墓園の修復プロジェクトが落成しました。中国人民がラーベ氏を記念するのは、同氏には命に対する大きな愛があり、平和を目指すからです

3. 国際的な影響を生じる原因

コンテンツのために奉仕する形である。ラーベ記念館が国際社会において大きな影響を生じることができるのは主に、それは異なる形のイベントを開催し平和の内容を反映し、世の中の人の平和に対するニーズを満足させたからである。今日の世界は平和を主流としているが、依然として人種・宗教・集団利益などの問題のために一部の地域では戦争・武力衝突やテロ事件が発生している。これらの衝突を解決するために、暴力で暴力を制する方法を採りたいと主張する人もいる。これはまさに元々複雑な矛盾をさらに悪化させ、これらの地域の人々に深刻な災難をもたらす。ラーベ記念館は、イベントの開催を通じて、平和の勇士としてのラーベ氏を褒め称え、平和宣言のスタイルを有する「ラーベの日記」を読み解き、今日の世界平和のテーマに合っており、時代の発展の潮流に乗った。

1) ラーベ氏は平和の勇士である

ラーベ氏の身分は一介のビジネスマンであるが、人類が戦争の脅威を受けていたときに、断固として勇敢に立ち向かい、平和外交家としての潜在能力を発揮し、世の中の人に平和の勇士のイメージを示した。日本軍が南京を占領する前、大多数の外国人はその地を離れることを選択した。ラーベ氏は政府・会社および家族や友人が南京から離れるようにという願いを拒否し、勇敢にも災難に遭った中国人民の

側に立った。この時のラーベ氏は、平和の使者の役割を演じた。不必要な犠牲をできるだけ避けるために、中国と日本の中でシャトル外交を行った。双方の軍事力の比較を通して、ラーベ氏は委員会を助け平和提案を出し、双方が同時に武器を捨てる作戦の説得を試みた。

1937年12月9日、ラーベ委員会主席がサインした一号と二号の電文がそれぞれ蒋介石と東京および上海の日本当局に送られた時「市街地では軍事行動をとらない。この目的を達成するために、委員会は南京周辺の全ての武装兵力を3日間停戦することを提案する。この3日以内に、日本軍は既存の陣地では兵を進めず、中国軍は市街地から撤退する。大量に危害が及ぶ一般人の苦境を考慮し、委員会はこの提案に対する態度を速やかに表明することを求める」と提案した³⁾。

日本軍が南京を占領した後、難民を救助する安全区の役割をさらに発揮するため、委員会は積極的に一般人に呼びかけ、さらには南京に足止めになっている中国兵士に対し、武器を捨てて安全区に避難するよう説得をした。安全区委員会主席およびナチ党地方組織のリーダー（この肩書は日本当局にとってやはり重みがある）として、ラーベ氏はしきりに日本大使館に手紙を書き、日本軍の残虐行為を通報した。防空壕とナチ党の旗を利用して日本軍の爆撃機に警告を出した。ナチス腕章とラーベ氏のドイツ人としての身分を利用し、完全武装兵士を阻止した。戦後、ラーベ氏は子孫に宛てた手紙の中でも、後世の人にお互いに憎むとか復讐をしないようはっきりと戒めている。「残虐な行為に対しては許すことができるが、忘れることはできない」と書かれている。これが、つまりラーベ氏の平和観、まさにこのような広くて奥深い度量と世を嘆き人民を憐れむ精神のため、ラーベ氏は南京大虐殺における守護神であり、国際平和を守る傑出した人物となった。2009年10月、ラーベ氏は百年にもわたり中国人民に最も愛され、中国と最も縁が深い「中国縁・十大外国の友人」⁴⁾にベチューン氏に次いで2位に見事ランクインした。

2) 『ラーベの日記』は平和宣言

1937年9月19日から1938年2月26日までの期間、ラーベ氏は毎日戦時日記の形で、見たり聞いたりしたことを記録した。『ラーベの日記』は、日本軍の残虐行為の日々の編年史である。まさにスペイン系アメリカ人哲学者のジョージ・サンタヤーナが「歴史を忘れる人は必ず同じ過ちを犯す⁵⁾」と指摘しているように、『ラーベの日記』は一つの平和宣言だといえる。

1996年12月12日、ラーベ氏の外孫であるウーズラ・ラインハルト氏(Ursula Reinhardt)はニューヨークで『ラーベの日記』を初めて公開した。日記の公開は、すぐに注目を集め、『人民日報』は1996年12月24日から28日まで、『ラーベの日記』について長編の連載を行った。1997年8月以降、『ラーベの日記』は、中国・ドイツ・日本・アメリカやイギリスで中国語版・ドイツ語版・日本語版や英語版が出版された。約2,100頁に及ぶ日記には、南京大虐殺の500件以上の虐殺事件が記載されている。日記を書くと同時に、ラーベ氏は、多くの報告や書簡形式の公文書および80数枚の現場で撮影した写真を念入りに保存し、これらの写真に対して詳細かつ正確な説明をつけている。胡繩氏は、『ラーベの日記』の序言で「『ラーベの日記』は近年発見された南京大虐殺研究の中で最も数が多く、最も完璧に保存されている史料である」と記している。ラーベ氏の祖国は第二次世界大戦中、日本の同盟国であり、ラーベ氏自身もまたナチ党南京支部の責任者である。これは、ラーベ氏の記述が他の人では取って代わりにくい特殊な役割を持たせることになった。ラーベ氏は、中立の立場で、事実を語らせ、日中交戦における双方の実際の状況や政治については、客観的で公正な評価をしているわけではなかった。南京大虐殺は人類の歴史上最も残忍な残虐行為の一つであり、この歴史を記録し、このような事件が繰り返されることを防ぐことは、人類の平和に対する大きな貢献でもある。

国際平和都市の命名はゴールではなく、南京が包容性を開放し、平和発展する過程での新しいスタートである。2018年国際平和日記念イベントが9月19日、南京で行われ、習近平中国国家主席は記念イベントに祝辞を送り、鳩山由紀夫元首相など、多くの国の政界の要人が挨拶を述べ、ラーベ交流センター学術委員会メンバー・南京大学国連教育科学文化機関平和学の教授責任者である劉成教授が基調講演を行った。記念イベントは「人類の運命共同体の構築を推進し、手を取り合い恒久平和と普遍的に安全な世界を築く」をテーマとし、国際平和日の設立の趣旨に沿って、世界各国および各国の人々の根本的な利益に合致している⁶⁾。ラーベ旧居は鮮血と戦火の洗礼を経験したが、現在のラーベ記念館は仁愛と平和の実を結んだ。国際平和博物館・第7回全国重点文物保护单位・第1回国家級抗戦記念遺跡に登録されるに伴い、ラーベ記念館は南京が国際平和都市になってからもこれまでどおり国際舞台で頻繁に平和の声を発し、南京の平和イメージを示し、新時代の中華民族の愛と平和に対する追求を体現していくであろう。

【注】

- 1) U Nakamura が2010年8月17日に書いた英語の原文：“We should not forget the fact of ‘John Rabe’. In addition, we should not forget what Japanese army did in Nanjing. Also, I am really glad to see the other students from China and Austria. They took me some places in Nanjing. They became my friends. I will share this experience with my classmates in Japan after go back to Japan.”
- 2) 石田一良『文化史学：理論と方法』浙江人民出版社、1989年、101頁。
- 3) ジョン・ラーベ『ラーベの日記』江蘇人民出版社・江蘇教育出版社、1997年、156頁。
- 4) http://baike.baidu.com/link?url=_jTsMsB1lqN0-HUy64_Y45opjLdCVL1Yucr2xGoFEaM4YdoATBrPlq6K6Oo1VsvuvPa-duN76So6n-bgzGKu9K
- 5) Human rights in the Asia Pacific 1931-1945, “A resource guide for teachers to support aspects of senior social studies curriculum.”, Co-published by B.C. Association for Learning & Preserving the History of WWII in Asia. P.4.
- 6) <https://africa.chinadaily.com.cn/a/201809/20/>

从战争到和平

——以拉贝纪念馆在南京国际和平城市建设中发挥的作用为例

杨善友

南京大学拉贝纪念馆副研究馆员
拉贝国际和平与冲突化解研究交流中心主任

2017年是日军南京大屠杀和中华民族全面抗战爆发80周年,也恰逢南京被评为国际和平城市。当年侵略者的足迹可能已经被时光冲洗殆尽,但他们的暴行罪恶不仅物化在全国各地的抗战遗址,而且无形于人类历史的耻辱柱上。饱受战争伤害的中国人民,特别是南京人民,对战争与和平的理解更为深切。作为全国第一批抗战遗址的拉贝纪念馆,不仅是历史的见证,而且通过举办一系列重大活动,提高了影响力,成为“南京对外文化交流基地”,为南京国际和平城市建设发挥了应有的作用。

1. 拉贝纪念馆举办的重大活动

南京大屠杀期间,德国西门子公司商人约翰·拉贝(以下简称“拉贝”)作为南京安全区国际委员会主席,不仅带领一批国际友人建立了“南京安全区”,设立的二十五个难民收容所,拯救了二十五万中国人民,其中,拉贝住所(西门子难民收容所)保护了六百多人;而且拉贝当年留下的日记也成为南京大屠杀的重要史料。为了永久的纪念,中德双方携手将位于南京大学校园内的拉贝故居建设为拉贝纪念馆。2006年开馆以来,拉贝纪念馆接待了包括德国前总统、日本驻中国副总领事等国内外参观者20多万人,举办了一系列宣传、教育、研究、交流等形式的重要活动。

1) 举行《拉贝日记》电影媒体发布会

2009年4月14日下午,“拉贝日记重返南京/重返历史”媒体发布会在南京大学拉贝纪念馆召开。南京电视台著名节目主持人大刚主持了这次媒体发布会。《拉贝日记》电影主创王中磊、国内主要演员张静初(金女大学生扮演者)、李明(拉贝司机扮演者),介绍了电影拍摄感想,国内外60多家媒体记者出席会议并分别采访了他们。会议还邀请拉贝纪念馆建设与管理资金捐资单位的代表及当年被拉贝保护过的幸存者代表出席了发布会。《拉贝日记》是唯一一部得到中国官方授权,由外国导演拍摄的南京题材影片。这一战争史诗大片的全球首映式于当地时间2009年2月7日在柏林国际电影节举行。由于影片正面表现了南京大屠杀的历史事实,因此剧组在寻找相关日本演员时遇到了很多困难,最后还是香川照之勇敢地迈出这一步。他说:“在日本没有多少人知道约翰·拉贝,这是个很复杂的电影,表现了很多面,但我愿意把它介绍给日本观众。”影片的中国制片人方华谊兄弟总裁王中磊表示:“制片和出品《拉贝日记》这部影片是中国电影人的荣耀所在。电影由之前的《约翰·拉贝》更名为《拉贝日记》也是考虑到这部作品在中国民众中的崇高地位。希望在电影暑期档公映时,铭记南京历史的中国观众能从那段惨烈历史中感受到人性的温暖,从中国民众的顽强不屈中获得力量。”

2) 举办国际和平学术研讨会

2010年6月8日,拉贝纪念馆主办的“纪念拉

贝逝世六十周年暨国际和平学术研讨会”在南京大学召开。来自德国、加拿大、日本以及国内部分高校的120余名专家学者参加会议，并围绕国际和平问题进行了长达3个多小时的热烈研讨。南京市委宣传部副部长王崑，德国驻上海领事馆总领事海盾，西门子(中国)有限公司副总裁、南京大学拉贝基金管理委员会主任委员王伟国，扬子石化一巴斯夫有限公司总裁布铭邦，博西家用电器(中国)有限公司副总裁兼首席财务官魏博等出席开幕式。周宪校长助理代表南京大学致辞说，今年是拉贝先生逝世六十周年，本次会议主要是为了纪念以约翰·拉贝为首的南京安全区国际委员会成员，弘扬国际人道主义精神，呼唤世界和平与和谐。王崑副部长在讲话中说，拉贝先生扶危济困、救苦救难的正义善举，七十多年来一直广为传颂。拉贝纪念馆和交流中心正式对外开放以来，充分发挥了作为宣传教育与文化交流平台的作用，对进一步缅怀拉贝先生仁爱之心、促进世界和平与人类文明进步，产生了积极的影响。海盾总领事在致辞中说，本次活动的举办不只是纪念过去，对未来也有很大启迪意义。他还深情回忆了二战期间德国犹太难民逃往中国上海避难的情景，并对中国人民当时的救助善举表示感谢。

3) 开展和平文化育人工作

2013年以来，拉贝纪念馆持续地开展青少年和平文化育人工作。一方面，通过挖掘馆藏档案中的和平文化元素，采取不同方式对青少年进行和平教育，顺应时代发展需求，是这次活动的初衷。主要包括：(1) 举行南京大屠杀国家公祭日活动。例如，2014年12月13日，拉贝纪念馆举行“诚·祭”集体悼念仪式。南京大学党委副书记朱庆葆出席仪式；(2) 举办专题讲座。例如，2014年12月4日，举办“和平勇士约翰拉贝”为主题的和平专题讲座。南师附中600多学生聆听拉贝故事。《东方卫报》、《南京日报》、《现代快报》进行报道；(3) 制作主题展览。例如，2015年5月，制作“贝德士：给全球以和平，给人类以慈悲——纪念中国人民抗日战争暨世界反法西斯战争胜利70周年”的专题展览。贝德士的学生，章开沅先生为拉贝纪念馆题字：南京大屠杀的历史见证。7月，英国内政部国务大臣麦克·贝茨勋

爵，在中国“为和平常走”期间，为此两次参观拉贝纪念馆；(4) 招收国内外学生志愿者。例如，目前已经有包括来自美国、日本、奥地利等国家的28位国际志愿者来馆服务。他们不仅学习了历史，而且互相之间建立了友谊。2010年，来自日本国际基督教大学的U Nakamura在拉贝纪念馆志愿服务时说：“我们不应该忘记拉贝，不应该忘记日军当年在南京的所作所为。中国、奥地利的学生们带我们参观了南京，我们都成了朋友，我回日本后，我会将我的经历分享给我的同学们”¹⁾。另一方面，通过对校史档案的整理挖掘，为学校的中心工作服务。南京大学为了发掘大学精神和南大底蕴，于2015年3月11日正式启动“南京大学校史文献资料整理与研究重点工程”。拉贝纪念馆乘势而为，主动请缨，充分挖掘、利用馆藏档案，为完成学校的校史研究和校史教育做出自己的贡献。拉贝纪念馆的馆藏档案(或称拉贝档案)主要有南京大学源头之一金陵大学档案和包括拉贝、贝德士等南京安全区国际委员会或其他国际救援组织成员的全宗档案，其中有四位是金陵大学的教授。“没有史料便没有历史”²⁾，因此，所有这些档案史料当然成为校史研究不可或缺的内容。同时，研究成果也成为学生和平教育的生动教材。拉贝纪念馆的和平育人工作分别荣获全国高校博物馆育人联盟主办的优秀育人项目二等奖；获教育部第七届高校校园文化建设优秀成果奖；荣获“南京大学校园文化十大品牌”等荣誉称号。

2. 拉贝纪念馆的国际影响

中国外交部部长王毅曾经在回答关于有人将当时的中日关系比喻为第一次世界大战时德英关系时说，与其拿一战前的德国做文章，不如以二战后的德国为榜样。中日关系、中德关系以及德国和日本对二战截然不同的态度在拉贝纪念馆都可以得到充分的体现。拉贝纪念馆作为日军南京大屠杀主题馆，是日本侵华战争的历史见证；拉贝纪念馆也是中德友好交流的结晶，承载着两国人民的友好情谊。

1) 拉贝纪念馆成为南京大屠杀的历史见证

2013年12月26日，日本首相安倍晋三悍然参拜供奉有14名二战甲级战犯的靖国神社。之后，少数日本右翼分子又一再恣意歪曲历史，在南京大屠杀死难者人数上做无谓的文章，甚至妄图否认南京大屠杀这一历史事实。如此等等的错误行为不仅粗暴地践踏了中国和其他亚洲战争受害国人民的感情，而且引起了国际社会的高度警惕。为此，中国外交部外国记者新闻中心和江苏省外办联合组织包括美国有线电视新闻网、美国《华尔街日报》、英国路透社、法新社、日本《朝日新闻》、日本时事通讯社、韩国联合通讯社等26家媒体45位外国驻华媒体代表，赴南京大屠杀遇难同胞纪念馆、南京市档案馆、拉贝纪念馆及抗日航空烈士纪念馆实地参观采访，亲身感受历史真相。2月20日上午9时许，记者一行来到位于南京大学校园内的拉贝纪念馆。为了让国际社会更多地了解日本侵华战争的历史真相，认清日本军国主义企图复活的本质的本质，拉贝纪念馆除向记者们介绍了常规展示内容外，还从档案柜里将几种馆藏档案第一次完整地展示出来。其中主要包括：拉贝的《轰炸南京》书稿、南京大屠杀史料集和南京大屠杀全史以及拉贝故居保护的难民名单。

在本次近三个小时的活动中，拉贝纪念馆始终以史料展示为主线，以档为证，用事实说话。各种介质历史档案的立体展示在媒体代表中产生了强烈的反响。来自俄通—塔斯社的记者马利宁·安东(Marinin Anton)、英国《每日电讯报》的童飞(Phillips Tom)说：“之前从没听过约翰·拉贝的名字，这次参观和采访给我们留下了很深的印象”；美国有线电视新闻网(CNN)记者查理(Miller Charles)和麦大伟(McKenzie David)表示：“南京大屠杀遇难人数是一件令人痛苦的事实，不应该在政治上再引起更多的争论”。约翰·鲁魏奇(John Ruwitch)当日就在英国路透社的新闻网上以“中国敦促日本正视南京大屠杀历史”为题进行报道。《大公报》记者李理在2月21日发行的《大公报》上，以“揭开伤疤认识中日历史与今天”为题，对记者一行在南京的参观活动进行了报道。同时，随报纸还附有一份李理写给拉贝纪念馆的亲笔信，信中写道：“作为长期报道中国外交政策的记者，我十分感谢你们对历史严谨和负责的

态度。愿真理永远战胜谎言”。就此次参观活动，外交部发言人华春莹24日介绍说：“正如不少外媒报道评论所指出的，面对这么多有力史实，如果日方仍试图抵赖，不思悔改，不仅世人无法理解，也会使国际社会对日本未来走向感到忧虑。”华春莹最后强调：“历史不可忘却，只有正视历史，以史为鉴，才能面向未来”。

2) 中德友谊的情感纽带

建筑是凝固的历史，也是时代的缩影。拉贝先生本着人道主义精神，给中国人民以保护和救济。滴水之恩，涌泉相报。在拉贝先生最困难的时候，中国人民也向他伸出了援助之手。1938年2月，拉贝奉调回国。不泯的良知仍驱使拉贝先生在德国继续揭露日寇在南京的滔天罪行，遭到纳粹的威胁与迫害，晚年的处境极其艰难。拉贝的遭遇传到南京后，当时的中国政府并没有忘记这位曾被难民敬奉为“活菩萨”的国际友人，想方设法提供各种帮助。由一市议员提议成立的拉贝劝募委员会向银行、钱业、大商店及地方慈善机关和当年受救济保护的市民劝募，不几日便募得1亿元，按市价折成美金2000元，辗转汇至德国援助拉贝。由于德国战后状况恶劣，任何可供食用之物均加以限制，有钱也买不到食物。南京市长沈怡在1948年3月得悉此讯后，以最迅速的方法，在瑞士购买4大包食品寄交拉贝，以表示南京市民对他昔日义举的感谢。正是这些食品，帮助拉贝一家度过最为艰难的“柏林危机”，给衰龄暮景中的拉贝先生以安慰。

在拉贝纪念馆开馆当日，面对承载着中德友谊的拉贝纪念馆，专程前来参加开幕式的中德双方贵宾感慨万千。拉贝先生之孙、海德堡大学医学教授托马斯·拉贝先生在祖父的雕塑前献上了一捧鲜花。他说，“祖父约翰·拉贝一直是全家人的榜样，他在二战期间保护中国朋友的勇敢行为，尽了一个人应尽的责任。祖父一生在中国呆了三十年，他热爱中国，了解中国，所以才会冒死帮助中国朋友。”，他真诚地说：“祖父能拯救超过25万人的生命，是有了南京安全区国际委员会所有国际友人的支持才得以实现的，这是国际和平人士的共同行动，而非个人行为。拉贝故居将作为中德友谊的载体，为人们理解和记住历史的真

相、避免冲突做出贡献。”德意志联邦共和国驻上海总领馆芮悟峰总领事说：“我们带着尊敬和谦卑的心情怀念约翰·拉贝先生的事迹。尊敬，因为他在正确的时间做了正确的事情，冒着生命危险，向需要帮助的人们伸出援手。谦卑，因为在此不久之后，带着德国名义的罪行发生了，在这位‘南京好人’的行为上投下了长期的阴影。我们可以公正地为这样一个曾经生活在南京的德国人而感到骄傲，他在艰难的时候留了下来，以保护他的中国朋友。还能找出比约翰·拉贝更好的代表中德友谊的事例吗？”

时至今日，习近平主席在谈到中德两国人民的历史和友谊时说：“德国人说，山和山不相遇，人和人要相逢。中国人民同德国人民有着悠久交往历史和深厚友谊。此时此刻，我不由得想起了一位中国人民爱戴的德国友人，他就是拉贝。70多年前，日本军国主义侵入中国南京市，制造了屠杀30多万中国军民的惨绝人寰的血案。在那个危急关头，拉贝联络了其他十几位在华外国人士，设立了“南京安全区”，为20多万中国人提供了栖身之所。拉贝在日记中详细记录了大屠杀内情，成为研究这段历史的重要证据中德共同建立的拉贝纪念馆在南京开放。去年底，由南京市建造的拉贝墓园修复工程落成。中国人民纪念拉贝，是因为他对生命有大爱、对和平有追求”。

3. 产生国际影响的原因

形式是为内容服务的。拉贝纪念馆之所以能在国际社会上产生重大的影响，主要是因为其举办不同形式的活动反映了和平的内容，满足了世人对和平的需求。今日世界虽以和平为主流，但依然因为种族、宗教、集团利益等问题而产生局部战争、暴力冲突和恐怖事件。为了解决这些冲突，还有人主张要采取以暴制暴的方式。这就使原本复杂的矛盾雪上加霜，给这些地区的人民带来深重的灾难。拉贝纪念馆通过举办活动，赞扬作为和平勇士的拉贝，解读具有和平宣言式的《拉贝日记》，契合了当今世界和平的主题，顺应了时代发展的潮流。

1) 拉贝是和平勇士

拉贝的身份虽然是一位普通的商人，但在人类受到战争威胁的时候，毅然决然挺身而出，发挥了和平外交家的潜力，向世人展示了和平勇士的形象。在日军占领南京之前，大多数外国人都选择离开了。拉贝拒绝了政府、公司以及家人和朋友要其离开的请求，勇敢地 and 受难的中国人民站在一起。此时的拉贝扮演了和平使者的角色。为了尽量避免不必要的牺牲，他在中日间进行穿梭式外交。通过对双方军事力量的对比，拉贝帮助委员会提出了一个和平建议，试图说服作战双方同时放下武器。1937年12月9日，由委员会主席拉贝签名的一号和二号电文分别传给蒋介石和东京及上海的日本当局，建议“在城内不采取军事行动。为了达到这个目的，委员会建议南京附近的所有武装力量停火3天，在这3天内，日军在现有阵地按兵不动，中国军队则从城内撤出。考虑到大量受到危害的平民的困境，委员会请求立即对此建议表态。”³⁾日军攻占南京后，为了安全区更好地发挥救助难民的作用，委员会极力呼吁平民，甚至劝说被困南京的中国士兵放下武器，进入安全区避难。作为安全区委员会主席和纳粹党地方小组的领导人（这个头衔对日本当局来说还是有分量的），拉贝频频写信给日本大使馆，通报日军的残暴行为；利用防空洞和纳粹党旗帜警告日军轰炸机；利用纳粹袖标和他德国人的身份阻止武装到牙齿的士兵。即使在战后给他子孙的信中，他也明确告诫后人不要互相仇恨和复仇。他说：“对暴行可以宽恕，但不可以忘却。”这就是拉贝先生的和平观，正是由于这种博大胸怀和悲天悯人的精神，拉贝先生成为南京大屠杀中的保护神，是维护国际和平的杰出人物。2009年10月，拉贝成功入选百年来最受中国人民爱戴，与中国缘分最深的“中国缘·十大国际友人”⁴⁾仅位于白求恩之后，名列第二。

2) 《拉贝日记》是和平宣言

从1937年9月19号到1938年2月26号这段时间里，拉贝每天以战时日记的形式，记录下他的所见所闻，《拉贝日记》是日军暴行的逐日编年史。正如西班牙裔美国哲学家乔治·桑塔亚娜指出的那样：

“忘记历史的人必定要重蹈覆辙。”⁵⁾从这个意义上说,《拉贝日记》不失为一本和平宣言。

1996年12月12日,拉贝的外孙女乌苏拉·莱因哈特在纽约向世人首次公布《拉贝日记》。日记的公布立刻引起世人的广泛关注,《人民日报》从1996年12月24日至28日,对《拉贝日记》进行长篇连续报道。自1997年8月开始,《拉贝日记》先后在中国、德国、日本、美国和英国出版了中文版、德文版、日文版和英文版。大约2100页的日记记载了南京大屠杀的500多个惨案。在写作日记的同时,拉贝还精心地保存了多份报告、公函以及80多张现场拍摄的照片,并对这些照片作了详实的说明。胡绳在《拉贝日记》的序言中说道:“《拉贝日记》是近年发现的研究南京大屠杀事件中数量最多、保存得最为完整的史料。”拉贝的祖国在二战中是日本的盟国,他本人又是纳粹党南京小组的负责人。这就使他的记述具有别人难以替代的特殊作用。拉贝站在中立的立场上,让事实说话,对中日交战双方的实际情况和政治是非作了客观公正的评价。南京大屠杀是人类历史上最残忍的暴行之一,记录这段历史,防止此类事件的再次发生,也是对人类和平的巨大贡献。

结语

国际和平城市的命名不是终点站,而是南京开放包容,和平发展动态过程的新起点。2018年国际和平日纪念活动于9月19日在南京举行,中国国家主席习近平向纪念活动致贺信,日本前首相鸠山由纪夫等多国政要出席并致辞,拉贝交流中心学术委员会成员、南京大学联合国教科文组织和平学教席负责人刘成教授发表了主旨演讲。纪念活动以“推动构建人类命运共同体,携手建设持久和平、普遍安全的世界”为主题,契合国际和平日设立宗旨,符合世界各国及各国人民根本利益。⁶⁾昔日的拉贝故居经历了鲜血与战火的洗礼;如今的拉贝纪念馆结出了仁爱与和平的硕果。随着被列入国际和平博物馆、第七批全国重点文物保护单位、第一批国家级抗战纪念遗址,拉贝纪念馆在南京成为国际和平城市之后,将一如既往地国际舞台上频繁发出和平的声音,展示南京的和平形

象,体现新时代中华民族对爱与和平的追求。

【注】

- 1) U NAKAMU RA 于2010年8月17日写的英语原文:“WE SHOULD NOT FORGET THE FACT OF ‘JOHN RABE’ . IN ADDITION, WE SHOULD NOT FORGET WHAT JAPANESE ARMY DID IN NANJING. ALSO, I AM REALLY GLAD TO SEE THE OTHER STUDENTS FROM CHINA AND AUSTRIA. THEY TOOK ME SOME PLACES IN NANJING. THEY BECAME MY FRIENDS. I WILL SHARE THIS EXPERIENCE WITH MY CLASSMATES IN JAPAN AFTER GO BACK TO JAPAN.”
- 2) 《文化史学:理论与方法》[日]石田一良著,浙江人民出版社,1989年12月版,第101页
- 3) 《拉贝日记》约翰·拉贝著,江苏人民出版社、江苏教育出版社1997年版,第156页
- 4) [HTTP://BAIKE.BAIDU.COM/LINK?URL=_JTSMsB1LQn0-HUY64_Y45OPJLDCVL1YUCR2XGOFEAM4YDOATBRPLQ6K6OO1VSVUvPA-DUN76SO6N-BGZGKU9K](http://baike.baidu.com/link?url=_JTSMsB1LQn0-HUY64_Y45OPJLDCVL1YUCR2XGOFEAM4YDOATBRPLQ6K6OO1VSVUvPA-DUN76SO6N-BGZGKU9K)
- 5) HUMAN RIGHTS IN THE ASIA PACIFIC 1931-1945, “A RESOURCE GUIDE FOR TEACHERS TO SUPPORT ASPECTS OF SENIOR SOCIAL STUDIES CURRICULUM.”, CO-PUBLISHED BY B.C. ASSOCIATION FOR LEARNING & PRESERVING THE HISTORY OF WWII IN ASIA. P.4.
- 6) [HTTPS://AFRICA.CHINADAILY.COM.CN/A/201809/20/WS5BA31022A310C4CC775E7474.HTML](https://africa.chinadaily.com.cn/a/201809/20/WS5BA31022A310C4CC775E7474.html)